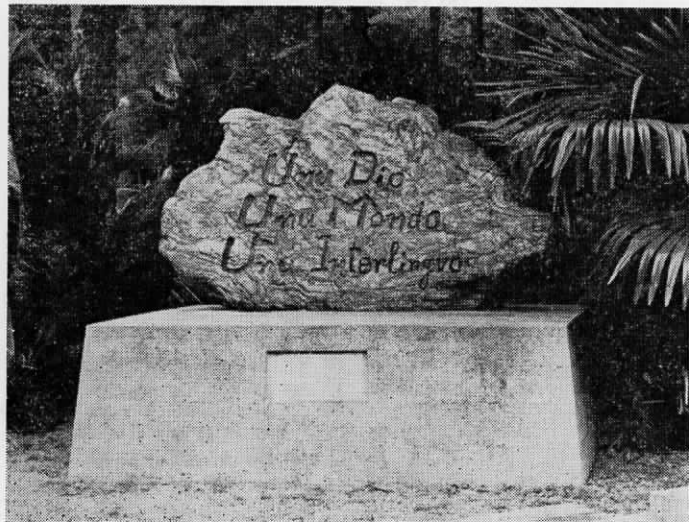


- 21 中村日出男「わが父中村有楽」La Movado 一九七〇年六月号、および中村の談話。
- 22 黒板のこうした態度については、風間丈吉『モスコウとつながる日本共産党の歴史』一九五一年 天満社。羽仁五郎『私の大学』一九六六年 講談社。北山茂夫「日本近代史学の発展」岩波講座『日本歴史』第二二巻 一九六八年（第二版）岩波書店版所収。その他。
- 23 信濃太郎『お茶の間の社会運動史』一九六九年 刀江書院。
- 24 スカラビーノ 前掲書。狭間直樹「劉師復と『民声』」『思想』一九七三年九月号 岩波書店。
- 25 L. Kókény, V. Bleier: Enciklopedio de Esperanto, 1938~1984, Literatura Mondo, Budapest. 『エスベラント百科事典』。
- 26 山鹿泰治「北京にいたエロさん」La Movado 一九五三年十月号およびその再録 一九七一年十二月号。
- 27 高杉一郎『盲目の詩人エロシニコ』一九五六年 新潮社。再録は同編『エロシニコ全集』第三巻 一九五九年 みすず書房。山鹿自身の前記の文章では、この点があいまいになっている。
- 28 近藤憲二『一無政府主義者の回想』一九六五年 平凡社。同『私の見た日本アナキズム運動史』一九六九年 麦社。
- 29 近藤憲二『私の見た日本アナキズム運動史』。
- 30 『遺稿西村蔡喜自伝』一九七二年 遺族私家版。西村蔡喜「汎太平洋労働組合第一回会議の回顧」『労働運動史研究』第五五~五六号 一九七三年九月 労働旬報社。江森盛弥「詩人の愛と死について」一九五九年 新読書社。『現代史資料』第一九巻 一九六七年 みすず書房。このうちの杉浦啓一と国領五一郎の陳述に左翼の方針がくわしく出ている。
- 31 山鹿泰治「国立労働大学とエスベラント」La Movado 一九七一年四月号。『リベルテール』のこの年一月号あたりにも同文。
- 32 Taiji Yamaga: Lao Tse y su libro del camino y de la virtud, traducido del Esperanto par Eduardo Vivancos, 1963, Llerria y Libertad, Mexico.



京都亀岡の大本教本部にある「一つの神、一つの世界、一つの国際語」を刻んだ碑

世界のいろはがひとつになるぞよ

『お筆先』

二・二六事件将校の手記から

一九三六年二月二十六日の朝は、雪が一面に東京の町を埋めていた。その日、いわゆる二・二六事件が起こった。戒嚴司令部が発表した事件のあらましは、「二月二十六日早朝、近衛歩兵第三連隊・歩兵第一連隊・歩兵第三連隊・野戦重砲兵第七連隊に属した将兵約千四百数十名は、軍秩をみだし、不法出動をあえてし、反乱を起こして、まず首相官邸・斎藤内大臣私邸・渡辺教育総監私邸・牧野前内大臣宿舎（湯河原伊藤屋旅館）・鈴木侍従長官邸・高橋大蔵大臣私邸等を襲撃し、斎藤内大臣・渡辺教育総監を殺害し、鈴木侍従長・高橋大蔵大臣に重傷を負わしめ（高橋大蔵大臣は同日薨去、ついでこれら反乱軍は麴町区永田町付近に位置してその内外の交通を遮断するにいたった。その目的とするところは、趣意書によれば、内外大危急の際、元老・重臣・財閥・軍閥・官僚・政党等の国体破壊の元凶をサン除して大義を正し、国体を擁護開眼せんとするにあった」というのである。

しかし、結果から言うと、かれらの精神的支柱であった真崎甚三郎・荒木貞夫らの高級将官には裏切られ、天皇そのものからは「反乱軍」の烙印をおされ、急遽他地方から動員されてきた「皇軍」の包囲の中で、例の「今からでも遅くはない……」という切りくずし宣伝にあって、指導者の一部は自殺し、大部分が降伏して、最後には軍法会議で、首謀者たちが銃殺され、「めでたく一件落着」となったのであった。そして、軍内部のいわゆる「皇道派」（極右軍国主義グループ）は潰滅し、「統制派」、

すなわち、軍幹部の体系的指導下の挙国軍国主義化を意図した「不テイのやから」の天下となり、東条政権の確立、明治憲法国家を崩壊にみちびく太平洋戦争へ突入していくわけである。もちろん、こう言っても、かれら「青年将校」が勝利を収め、「皇道派」がこの国を支配しておれば、人民にとつてより望ましい状態になったとはユメにも考えられないのであるが。

この二・二六事件の関係者のうちで、もっとも猛烈な気性を持っていたと言われる磯部浅一元主計中尉は、獄中で次のように書いている。⁽¹⁾

「悪鬼となつて所信を貫徹するのだ。ラセツとなつて敵類賊カイを滅尽するのだ、余は祈りが日に激しくなりつつある、余の祈りは成仏しない祈りだ、悪鬼になれるように祈っているのだ、優秀無敵なる悪鬼になるべく祈っているのだ、必ず志をつらぬいて見せる、余の所信は一分も一厘もまげないぞ、完全に無敵に貫徹するのだ、妥協も譲歩もしないぞ。

余の所信とは日本改造法案大綱を一点一角も修正することなく完全これを實現することだ。

法案は絶対の真理だ、余は何人といえどもこれを評し、これを棄却することを許さぬ。

法案の真理は大乗仏教に貫徹するものにあらざれば信ずることはできぬ。

しかるに大乗仏教どころか小乗もジュ道も知らず、神仏さえ知らぬ三文学者、輕薄軍人、道学先生らが、わけもわからずに批判せんとし、こばたんとするのだ。

余は日蓮にあらざれども法案をそしる輩を法謗のオン賊^{ほうぼう}と言いつてハバカラヌ。

日本の道は日本改造法案以外にはない、絶対がない。日本がもしこれ以外の道を進むときには、

それこそ日本の没落の時だ。

明らかに言っておく、改造法案以外の道は日本を没落せしむるものだ、いかんとなれば官僚・軍閥・幕僚の改造案は国体を破滅する恐るべき内容をもっているし、一方高天ヶ原^{たかまがはら}への復古革命論者は、ともすれば公武合体的改良を考えている。共產革命か復古革命かが改造法案以外の道であるからだ。

余は多弁を避けて結論だけを言っておく、日本改造法案は一点一角一字一句ことごとく真理だ、歴史哲学の真理だ、日本国体の真表現だ、大乗仏教の政治的展開だ、余は法案のためには天子呼び来れども舟より下らずだ。」

これはこの年の七月三十一日の手記。冒頭に「明日は十五同志の三十七日なり」と書かれており、現役軍人たちの第一次死刑執行のあと、八月十九日の第二次処刑で、退役将校の磯部・村中孝次、そしてかれらの理論的指導者と目されていた北一輝とそのエージェント西田税^{さい}（に）したちから、みつぐと読む人もある）らが銃殺される直前のものである。

北一輝の誤れる国際語論

事件の実質的指導者のひとりが、かくまでも執拗に——死を前にひかえてのヒステリー現象でもあらうが——守りとおそうとした北一輝の『日本改造法案大綱』には、いったい何が書かれているので

あろうか。

くわしくは、ロシア革命の二年後に書かれたこの本を直接見てもらうことにして、要約すると、北の意図する「革命的大帝国」は、まず「天皇は全日本国民と共に国家改造の根基を定めんがために天皇大権の発動によって三年間憲法を停止し両院を解散し全国に戒厳令をしく」ことから始まり、私有財産の制限、華族制廃止、婦人参政権を否認した二十五歳以上による普通選挙の実施の上になつた軍国主義的、侵略主義的政権を樹立しようというのである。クーデタ政権の実質的担当者、天皇——現実の天皇、つまり当時の大正天皇は精神異常のうわさがあつたくらいだから、北の考慮外にあり、どうやら北の頭の中へのみ存在した、多分に伝説化された明治天皇を意識したもの——を頂点とする再組織された在郷軍人団会議である。こうして、必要とあらば、帝国主義列強と武力をもって戦い、極東・シベリア・オーストラリアにおよぶジンギスカン以上の大帝國を作りあげる、というのである。

そして、このことを実現するためには、教育制度も根本的に改革されなければならない。

「国民教育の期間を、満六歳より満十六歳までの十か年間とし、男女を同一に教育す。

学制を根本的に改革して、十年間を一貫せしめ、日本精華（ママ、神妙）に基づく世界的常識を養成し、国民個々の心身を充実具足せしめ、おのおのその天賦を発揮し得べき基本を作る。

英語を廃して国際語^{エスペラント}を課し第二国語とす。」

として、さらにその理由を説明している。

「注三 一切にわたりて英語を廃するゆえん。英語は国語教育として必要にもあらず、また義務

にもあらず。現代日本の進歩において英語国民が世界的知識の供給者にあらず。また日本人は英語を強制せらるる英領インド人にあらず。英語が日本人の思想に与えつつある害毒は英国人が支那人を亡国民たらしめたるアヘン輸入と同じ。……言語は直ちに思想となり、思想は直ちに支配をする。一英語の能否をもって浮薄軽ちようなる知識階級なるものを作り、店頭に書冊に談話にその単語を挿入して、とくとしてとんでんとして恥なき国民に何の自主的人格あらんや。国民教育において英語を全廃すべきはもちろん、特殊の必要なる専攻者を除きて全国より英語を駆逐することは、国家改造が国民精神の復活的躍動たる根本義においてとくに急務なりとす。」

北の思想の出発点から結論にいたるいっさいを否認するわたしたちも、本居宣長以来の研究にたしかえて、言語が思考方法におよぼす影響についての北のここまでの所説には同感を表明する。

そして、北はさらに説く。

「注四 国際語を第二国語として採用するゆえん。しかしながら実に他の欧米諸国に見ざる国字改良、漢字廃止、言文一致、ローマ字採用等の議論百出に見るごとく、国民全部の大苦悩は日本の言語文字のはなはだしく劣悪なることにある。そのもつとも急進的なローマ字採用を執行するとき、幾分文字の不便はまぬがるべきも、言語の組織そのものが思想の配列表現において、ことごとく心理的法則に背反せることは、英語を訳し漢文を読むにすべて日本文が転倒して配列せられたるを発見すべし。国語問題は文字または単語のみの問題にあらずして言語の組織根底よりの革命ならざるべからず。しかして不幸なる幸は、中等教育に英語を課し来れる慣習のために、その程度の教育者も被教育者も、何らかの言語を習得すべきことを必然的に確信せることなり。国際語の合理的

組織と簡明正確と短日月の修得とは世人の知ることし。成年者が三月または半年にて足る国際語の修得が、中学程度の児童、一、二年にして完成すべきことは、英語が五年間没頭してなお何の実用に応ずる完成を得ざる比にあらず。児童は国際語をもって国民教育期間中に世界的常識を得べし。しかし欧米の革命的団体は大戦のはるか以前、これをもって国際語とせんと決議せしほどのもの。もつとも不便なる国語に苦しむ日本はその苦痛をのがるために、まず第二国語として並用する時、自然淘汰の理法によりて五十年の後には国民全部がおのずから国際語を第一国語として使用するにいたるべし。したがって今日の日本語は特殊の研究にとりて梵語、ラテン語の取扱を受くべし。」

ウルトラ・ナショナリストは言語問題においても、そのウルトラぶりを発揮している。われわれは、民族問題、言語問題を、北のように甘く考えることはできない。北の所説をもつてすると、もしも二・二六事件が成功して、北政権が確立していれば、一九八六年、つまり、今から十年余り後には、日本語が「特殊専攻者」だけのものとなり、エスペラントが国内でも共通語として使用されることになるわけである！ さきに、言語と思考の関係を正しく説いた北が、ここでは文字と言語をときとして同一視する誤りをおかしていることを指摘しておく必要がある。ローマ字論者にしても、カナモジ論者にしても、日本語固有の構成を無視した表記法を考えてはいない。エスペランティストもまた、将来の「世界語」をその展望の中においてはいるが、エスペラントを性急に「世界語」にしようとは考えてはいない。また、はたして日本語が、北の言うように「劣悪」であるかどうか。わたしたちはそうは考えない。むしろ、北の言語思想の裏に、英語を日本の国語にしようと主張した欧化論

者、森有礼の思想の一変種を見るものである。

北の「共産党宣言」とも言うべき「大綱」はさらにつづく。

「注五 国際語の採用がとくに当面に切迫せる必要ありという積極的理由。下掲国家の権利に説くごとく、日本はもつとも近き将来において、極東・シベリア・濠洲等をその主権下におくとき、現在の欧米各国語を有する者のほかに、新たにインド人・支那人・朝鮮人の移住を迎えうがゆえに、ほとんど世界すべての言語をわが新領土内に雑用せしめざるべからず。これに対して朝鮮に日本語を強制したごとく我みずから不便に苦しむ国語を比較的好良なる国語を有する欧人に強制するあたわず。この難問題は実に三、五年の将来に迫れるものなり。主権国民がシベリアにおいて露語を語り、濠洲において英語を語る転倒事をなすあたわざるならば、日本領土内に一律なる公語を決定し、彼らが日本人と語るときに彼らの公語たらしめざるべからず。劣悪なる者が亡びて優秀なる者が残存する自然淘汰律は、日本語と国際語の存亡を決するごとく、百年を出でずして、日本領土内の欧州各国語、支那・インド・朝鮮語は、また当然に国際語のために亡ぶべし。言語の統一なくして大領土を有することは、ただ瓦解にいたるまでの槿花一朝の栄のみ。」

以上をもつて、われわれエスペランティストにとってあまりにもありがたすぎる日本型ファシストのカリスマ的予言は、この問題の範囲においては終結する。そして、北自身によつても、またその後継者たちによつても、この部分は発展させられるところか、とりあげられてもいないようである。北のエスペラント論はこの点においては、大杉よりも、はるかに不運であると言えよう。もつとも、これも「いないようである」と書いているように、最近さかんになってきた北研究のいちじるしい発展と

右翼思想の研究に筆者がついていけないため、案外な見おとしがある公算もあって、断言できない。しかし、北と前後する右翼の指導者たち、たとえば、大川周明・井上日召・権藤成卿・橋孝三郎・影山正治・津久井竜雄、それに古手の鹿子木員信、新手の保田与重郎から三島由紀夫まで加えてみても、かれらの間で、国際語の問題が考えられた形跡はなさそうである。唯一の例外は、自ら「わたしは反動です」とマーク・ゲインに名刺を出したと言われる元九州大学教授、元国民精神文化研究所長の藤沢親雄である。藤沢については後にふれるが、この「反動」も生まれついてからの反動ではなかった。

二・二六事件の指導者たちの全部が、磯部のような北盲従者ばかりでなかったことは、十分考えに入れねばならぬが、それにしても、「一点一角も修正することなく」北のプログラムが実現していたならば、どうなっていたことだろうか。エスペランティストであるわたしたちが、北政権の銃口の前に立たされていたことだけは確実である。

北とエスペラント——ひとつの推定

そこで考えたいことは、北とエスペラントとの結びつきがどの時点で起こったのであろうか、というところである。伊東三郎は、「大川（周明）氏は同じ（東亜経済）調査局にいた藤沢親雄がエスペランティストなることを知り、一夕知友を介して藤沢氏を聘し、エスペラントの話を聞いた。この集りに何



北 一 輝

（盛三）氏もいた。これが後年同氏が熱心なエスペランティストとなり後藤（新平）氏らをもひきつけるにいたった端緒だ。同じくこの席上に北一輝氏もいた。これがその後同氏の『日本改造法案』にエスペラント採用が書かれるにいたった因縁だ」と書いているが、これをそのままウノミにはできない。第一、話そのものがまた聞きなので、伊東の名著『日本エスペラント学事始』の中の多くのデータのよう、まちがっている公算が大きい。わたしの推定をのべると、やはり、堺利彦・大杉栄らと北との交友関係と社会主義の中にその源泉を求めるべきであると思う。

十ば一からげに「主義者」のレットルをはられていて、少数者意識と抵抗心で燃えていた当時の北は、思想のカキを越えて交友関係を持っていた。とくに、北・大杉・山鹿、それに中国にいた医師長田実、大本教に走った赤化将校飯森正芳、アナキズム運動で大杉と協力、あるいはその助力を受けていた張継らの相互関係は、そうとう密接、複雑、かつ怪奇なものでもあった。大杉の殺害に北が憤激したこと、北の腹心、岩田富美夫が、当局の手先として、大杉の葬儀を妨害するために、式場からその遺骨を奪取したことが、北の中ではなんら矛盾なく考えられていたらしい。したがって、北のエスペラントに関する知識は、堺・大杉・山鹿から得たものと考えの方が、より妥当であらう。ヨーロッパの

革命団体がエスペラントの採用を決議したというのも、前述の『直言』から得た知識であろうし、三か月でエスペラントが学習できるというコトバの背後には、大杉が三か月間の刑務所生活で学んだことがひそんでいたと思われる。

一九一四年か、それとも一五年のことか、衣食に窮した山鹿泰治が、黒板の家を出て、北一輝の家に書生として住みこんだことがある。ここで北家の女中のような仕事をしていた現在の山鹿未亡人みかさんと良い仲になり、駆け落ちするという事件があったのだが、もしも北が思想だけではなく、エスペラントを現実にある程度学んだとしたならば、おそらくこの期間を考えることが、いちばん自然である。もっとも、どの程度までモノにしていたかについては、何の証拠も残っていないようである。なお、長谷川義記は『北一輝』の中で、北は同居をさせた山鹿に毒を盛られた、と書いているが、これは長谷川が北の書いたもの、あるいは語ったところを、そのまま信じこんだのであろう。山鹿がそんなケチな男でなかったことは、わたしたちが確信するところであり、毒殺せねばならない事情などもあるはずがない。ましてや、北自身が精神病理学の対象に価するような人間で、夜中にひとりて便所へ行くのをこわがったような男であることを、長谷川自身が書いていてはいないか。みかさんが作った食事にあたって下痢したか、吐いたぐらいの事件を大げさに騒ぎたたものであろう。

独占資本の横暴をこらす、それと癒着している重臣たちをやっつける、と称しながら、三井・久原などの財閥や牧野内大臣に金をもらっていた言行不一致のウルトラ・ナショナリストの書いたものをそのまま信じこむことは、研究者のとるべき態度ではなからう。北にしても、大川周明にしても、はじめから資本の犬以外の何物でもない。人を見るには、コトバではなく、その行動をもってせよ、と

は孔子さまの昔から多くの人が説くところである。二・二六事件に先行した五・一五事件のときに、北の腹心、西田税が仲間のひとりに殺されなかったことも、この観点からするとうなづけることである。

以上は、同時に『日本改造法案大綱』のエスペラント論そのものに投げかける不信でもある。

北は一八八三年、佐渡に生まれ、初期社会主義の影響を受けて、一九〇五年、早稲田大学の聴講生となり、一九〇六年には『国体論及び純正社会主義』を自費出版、発売禁止。このあと中国革命同盟会や黒竜会に関係した。両者とも、いわゆる大陸浪人のグループである。一九一一年、黒竜会から中国へ派遣され、漢口・南京で国民革命派の右翼、黄興や宋教仁らと行動を共にした。一九一三年、日本政府から退去命令を受けて帰国。一九一五年には『支那革命外史』を書き、一六年には再び中国へ。『日本改造法案大綱』は一九一九年、五・四運動のあらしの中で書かれた。その後の北の行動については、重臣や財閥から金をとっては、その打倒を主張し、法華経の行者と称しては神がかりの予言めいたことを並べて軍に接近し、西田を通じて青年将校との密接な連絡を持ち、「皇道派」なるものを作った。二・二六事件では、自宅から電話で反乱軍に指示を与えたり、上部工作を指図したと言われる。もっとも、この最後のあたりについては、軍法会議でのデッチあげだという説もあるが、とにかく事件の首謀者とされて、銃殺されたことは、はじめに書いたとおりである。

大本教とエスペラント——源流は北一輝か

それでは、北のエスペラントの思想は、何者にも継承されることなく、そのまま立消えになったのであろうか。

いや、それは意外なところに種をまいていた。一世の怪物出口王仁三郎が指導した大本教の中に根をおろしたのであった。(実は、この「大本教」というのは正確な名称ではなく、立教以来、この教団と其の外郭団体は何回となく、時局に応じて改称しているのであり、一九二三年、この教団がエスペラントを導入したときは「皇道大本」と名のついていたし、現在は「宗教法人大本」というのであるが、便宜上、通称にしたがって「大本教」と統一名称で呼ぶことにする)

「一九二三(大正一二)年の五月二十七日、この日はまことに意義ある日となった。というのは、王仁三郎から国際語エスペラントを学習するようにと加藤明子^{かとうあきこ}が命じられたからである。……(エスペラントは)しかしまだ日本国内では、人びとの間にはひろく知られていなかった。けれども、それらの状況についていち早く注目していた王仁三郎によって、一九一八(大正七)年ごろにすでにして、『エスペラントは世界を支配する言葉になる』と役員の一部には語られていた。くわえてフィンチからも、バハイ教ではこの国際語をとりあげていることをきき、その学習への意欲はいっそうたかまっていた。



出口 王仁三郎

王仁三郎の命令をうけた加藤は、その学習法がわからないので困っていたところ、たまたま京大在学の高見元男から送付されてきた新聞のきりぬきによって京都同志社大学致遠館で、六月一日より十二日までエスペラントの講習会がひらかれることを知り、さっそくその講習会に出かけて受講した。

以上が『大本七十年史』の語るエスペラント導入にいたる経過である。説明を加えると、バハイ教というのは、一八四四年、イランで起こった新興宗教で、エスペラントをその宣伝用のコトバのひとつに使っていた。ザメンホフの娘リジアもその信徒のひとつであり、エロシエンコも若干の関係を持っていた。もともとエロシエンコの場合は、日本へ来ていた宣教師アグネス・アレキサンダーのたのみで、今でいうアルバイトで、教団の宣伝物を翻訳しただけでも知れぬが、これが秋田雨雀などにも相当の影響を与えている。その宣教師、アイダ・エ・フィンチというのは、この当時六十六歳のアメリカ婦人で、静岡県三島から大仁^{おほひと}に向かう電車の中で大本教の二代教主出口すみ子と出会ったのが機縁となり、一九二二年の夏、大本教の綾部の本部をおとすれた。そのとき、エスペラントの

採用をすすめたというのである。ついでに言う、高見元男というのは、のちに王仁三郎とすみ子の娘、三代教主直日の夫になり、出口日出麿と名のつた人物である。

エスペラントを大本教に結びつけたのがバハイ教であるということを、何回も当事者たちから聞かされたが、それを信用できない宮本は、執拗にそれ以外の源流を求めようとして、ついに『日本改造法案大綱』にぶつかったのであった。そして、大本教の国際部長であった重栖度哉（みすのりや）にたのみこみ、当時の関係者の話を聞いてもらい、ついに王仁三郎の政治的副官とも言うべき役割を勤めていた大國（おおくに）以都雄（いづの）（本名は大深浩三）にインタビューすることに成功した。それがいつのことであったか、残念ながら日時をおぼえていないが、このことについて『ラ・トルチュ（8）』というエスペラントのミニコミ雑誌に発表したのが一九六五年七月であるから、おそらく同年の五月ごろであったはずだ。以下はそれからの再録であるが、速記でもテープにとったのではなく、ノートを後に整理したものだから、表現には相当のズレがあろう。

宮本——『大本七十年史』上巻に出口さんが、「役員の一部にエスペラントの有益さを説いた」という一節があります……。

大國——あれは大正七（一九一八）年に信者の秦真次（はましんじ）（当時中佐、後に中将。たしか二・二六事件のときの憲兵司令官）がヨーロッパ視察から帰って来て、ポーランドで知った、と言って、聖師様に話したことがはじまりです。

宮本——北一輝との関係は？

大國——大正九（一九二〇）年十月中旬のことでしたが、北が聖師に『日本改造法案大綱』を見

せたのを、わたしに回されました。その中にエスペラントのことを書いてあり、国際語と書いてエスペラントとフリガナしていたことまで、よく承知しております。わたしは当時、『大正日日新聞』（本社大阪、大本教が経営）の編集部におり、図書室主任をしておりましたが、さっそくこれをプリントで五〇部作って、幹部たちに見せました。

宮本——ホホウ、そんなことをして、あとで事件になりませんでしたか。

大國——いやあ、やられました。事件（第二次大本教弾圧のこと）のとき、わたしだけ特別に出版法違反の容疑で厳重に調べられましたよ。これから先のエスペラントとの関係はよく書かれているとおり。……加藤さんはもう亡くなりましたが、当時、教団内部で女性としては最高の地位にいた人で、『霊界物語』の口述筆記などもやっていました。

宮本——ところで、『改造法案』のエスペラント論は、その後文献的に発展された形跡がなさそうですね……。

大國——そうですね。文章になったものは、わたしも知りません。しかし、西田税などは理解を持っていましたよ。……それに、秋田雨雀さんらの運動のことも、右翼内部でだいぶ問題にされていて、これがより以上の接近をさまたげたように思われます。

宮本——ところで、橋本大佐らの十月事件は、のちの「満州国独立」に結びつくものですが、大本がこれを支持した形跡が残っていますが……。

大國——そうですね。……満州国についての大本の役割は、そうです、石原莞爾（いはらかんじ）がはっきり依頼したのですが、「満州がいよいよ独立する。そのときにはエスペラントを採用する。これを満人に

教えるための教師団の編成を大本で引受けてもらいたい」というのが、この事件と大本とのすべてでした。

幸か不幸か、石原は東条英機ら軍主流派との衝突から満州国を追われ、出口王仁三郎の満州国へのエスپرانتオ導入という「壮図」は碎かれるわけである。

大國以都雄は、このインタビュア当時「参議」という名誉職におかれていた。東大で「日本ファシズム」の研究に従事していたドイツの青年エスپرانتチスト、ウルリッヒ・リンスが大國にインタビュアした一九七一年には、もう相当のお年よりで、話をほとんど聞けなくて残念、とリンスは宮本に語っていた。

大本教のエスپرانتオ運動

さて、大本教はエスپرانتオ運動に積極的に取組み、信者たちも熱心に学び、一九二三年七月には大本エスپرانتオ会を設立、それがのちにエスپرانتオ普及会と改称され、教団の有力な外郭団体のひとつになった。さらに一九二五年には西村光月をヨーロッパへ送り、かれに、その翌年一月から Onoto Internacia (『国際大本』) という雑誌をパリで創刊させ、ヨーロッパ各地でエスپرانتオによる宣伝を試みた。この雑誌は一九二七年までパリで発行されており、この間、西村は各地を旅行して、大本教とエスپرانتオの宣伝をつづけ、その年の十一月に帰国した。

大本教全体のことについて書くのは、この本の目的でないで、そのエスپرانتオ運動だけに限りたいわけであるが、この当時の教団、とくにその外郭団体であった昭和神聖会の活動のことにふれないですすことはできない。これは事実上、信者集団に、頭山満・内田良平などの右翼の巨頭たちの名をかりて作った団体であったが、まさにファシズム運動そのものであった。もし、日本に、ヒトラー的、ムッソリーニ的な、厳格な意味でのファシズム団体、つまり、反共、反資本主義、小市民層の大衆運動という性格をそなえたものを求めるとすれば、おそらく、この昭和神聖会ただひとつではなからうか。他の右翼団体のことごとくは、たとえば橋孝三郎や権藤成卿らの農本主義的なものにして、「大衆運動」でないという点において、「純粹ファシスト」の資格に欠けているからである。そして、「民主主義共和国」という思想を持たずに「立替え立直し」を呼号する長髪騎馬の大本教青年隊の行進は、まさにファシストのそれであった。一九三五年八月九日、コミンテルン第七回大会で山本懸蔵は、日本におけるファシズムの典型として、この教団によって行なわれた「国策の決定的転換」を求める請願運動を指摘している。

周知のとおり、大本教は一九二二年の第一次弾圧で、王仁三郎・浅野和三郎（イギリス文学者、のちに心霊学研究者）らの最高幹部は不敬罪で起訴され、のちに無罪になったが、この事件の前後から、浅野をはじめとして、岡田茂吉（『世界救世教』の初代教主）・谷口雅春（『生長の家』の主宰者）・岸一太ら、多くの離脱者を生んだ。一九三五年の第二次弾圧では、クーデタを企図したとして、信者三〇〇〇人が検挙され、相当数の死者まで出し、王仁三郎以下六一名が治安維持法違反と不敬罪で起訴され、教団の建物などいっさいが爆破されるといふ事件に発展した。このクーデタの意図については、二・二

六の被告、村中孝次の手記は肯定しているが、教団側ではもちろんキッパリ否定している。宮本の考えによれば、これは教団側の主張どおりであろう。理由は簡単、教団およびその周辺には、クレータをやつてのけるだけの理論と実行力がなかったと判定されるからである。むしろ教団が右翼の財源になっていると考えた政府当局の意図と、下部信者を食い荒らされる他教団などの動きが真の原因だと思われる。事実、資金提供を依頼した北一輝に対して王仁三郎が「神様のおぼしめしを聞いた上で」と答えて別れ、その直後に教団弾圧があったことは『大本七十年史』も明記しているところである。高橋和巳の『邪宗門』は、たしかに一部分大本教をモデルにしているが、著者自身がことわっているところ、明らかにフィクションである。大衆的反乱を組織するようなエネルギーは、この教団にはついになかった。

そして、教主、またはそれに代わるべき存在を中心に団結するというあまりにも日本的な宗教団体独自の性格から言って、弾圧に抗して再建をはかる自発的な運動はついに見られず、わずかに救援活動に力を集中するだけであり、敗戦を迎えて「信仰の自由が保証」されるようになるまで、もはや大本教系統のエスベラント運動は息をひそめた。もちろん、個々の人びとが研究をつづけていたであろうが、それもきわめて少数者であり、あるいは教義から訣別した人たちであった。この点、「コミンテルン承認の最後の中央委員」袴田里見を失ったあとも、なんらかの形で各地で、とくに関東と関西で、再建運動をこころみた日本共産党、またその外郭団体と規定してもよい日本プロレタリア・エスベラント同盟とは事情を異にしている。

左へ右へ——大本教の平和運動

大本教のエスベラント運動が復活したのは一九五〇年である。まもなく、かつての『国際大本』はオオモトの名で復刊され、隔月刊でいまもひきつづいて亀岡の本部から発行されている。編集部の中心中村陽宇は、世界でもっとも有能なエスベラントのひとりである。その対外宣伝活動が活発化するにつれ、あわて者のヨーロッパのエスベラントの間では、大本教が日本の代表的宗教だと思ひこんでいるような場合さえしばしば見受けられるところである。

昭和神聖会に代わって、人類愛善会の名による外郭団体が精力的に動きだした。(実は、昭和神聖会というのが、人類愛善会を「時局便乗」的に改称したのであった)そして一大転換を演じてみせた。それは右翼団体から平和運動団体への「回れ左」であった。日本宗教者平和協議会の関西の(いや、日本の、と言ってよからう)中心のひとり三代教主の娘むこであり、人類愛善会最高幹部の出口栄二その人で、全教団をあげて平和運動に参加した。類似の転回を見せた他の教団のひとつに日本山妙法寺があるが、数からすれば、それは大本教の前に問題ではなかった。世界連邦運動にも(これが平和運動かどうか問題点が多いが、ここでは一応こうしておく)、原水爆禁止運動にも、信者たちが争って参加した。平和行進にはエスベラント普及会や人類愛善会の旗がひるがえっていた。エス文『大本』誌や『人類愛善新聞』はときには平和運動の機関紙とさえ見えた。これを見た梅棹忠夫はこう書いた。

「卒直にいうと、日本の宗教団体の平和運動は、たいていきいごとであって、ほんの『おつきあい』の程度のもので多いのではないかという印象を、わたしなんかはもっている。それは教団の活動のなかの、ごく小さい部分をしめるにすぎない。しかし、わたしは、大本をしらべているうちに、これはすこしちがうかも知れない、と思いだした。たとえば人類愛善会の出版物には、『戦争はなぜ起る』とか、『世界連邦都市宣言の手引き』とか、平和運動のパンフレットがやたらにあるし、『人類愛善新聞』は、妙な言い方だが、ちょっと見るとまるで極左の新聞みたいな印象さえうける。大本にとっては、平和運動は生命である。大本から平和運動をとり去れば、のこる部分はごく小さいのではないか。教団の人はこういう言い方をきらうかも知れないが、これはどうも、共産党とともに、日本における最も戦闘的な平和主義者の団体であるかも知れない。」⁽¹⁾

一九六〇年三月の『中央公論』誌上でのことである。

それからしばらくして、影山正治ら大東塾系の右翼の干渉があったとか、公安調査庁が動いているとかいうニュースが流れ、鶴見俊輔らが『人類愛善新聞』支持の声明を出したりしたが、最終的には出口栄二が「失脚」し、米川清吉がとって代わった。同時に『人類愛善新聞』が一時休刊した。エス文『大本』誌からは *pacnovado* (平和運動) の P の字も見られなくなり、大本教の平和運動は、世界連邦関係を除くと、完全に姿を消した。数年前の参議院議員選挙には、米川が自民党候補(「生長の家」出身)に買収された容疑で取調べを受けた。そして、一九六九年のいつだったか、『読売新聞』が報道した、「大本教団、安保支持を声明」と。しかし、これは誤報であった。一部幹部がこの種の声明を出そうと提案したのを、三代教主、出口直日が「政治に口を出すな」という意味で制止したのだ、と

いうニュースがわたしたちの耳にはいつてきた。初代および二代教主が、王仁三郎とときに衝突していたのが、まさにこの教団の政治的側面だったとされている。

ともあれ、今の大本教のエスペラント運動には、世界連邦運動的思想がときどき顔をのぞかせるだけである。さまざまの湖ロブのように、この教団も一定の周期で移動するのであろうか。「戦闘的平和主義者の一団」がその「戦闘的」だけをかきついで、おそるべき先祖がえりをしつづけるのではなからうか。いずれにせよ、敗戦後の農地解放の間にはさんでの日本農民層の精神構造をさまざまなと見せてくれているのは、この教団の動きであり、また、その文化運動のひとつとしてのエスペラント運動の思想的背景でもある。「大本から平和運動をとり去れば、のこる部分はごく小さいのではないか」と梅棹が書いてから一〇年余り経過した今日である。

ついでに書いておく。その昔、この教団がエスペラントと共にとりあげた日本式ローマ字運動は、その後、全然復活のけはいもない。

体制的な、あまりにも体制的な……

ここで梅棹にならって、王仁三郎の『記憶便法エス和作歌辞典』⁽¹²⁾から抄出しておく。これは、当時、つまり第一次大本教弾圧のあと、エスペラントを教団に導入した時代の王仁三郎の思想をよく伝えているからである。念のために言うと、この本は、「わずか一か月の学習のあと」で、同書の序文

を書いた由里忠勝によると、「わずか一五日間に」口述筆記させたものであり、王仁三郎の期待に反して、エスベラントの「単語をおぼえる」ためには何の役にもたぬダジャレにすぎぬが、左右上下、どちらにでも解釈できる『お筆先』や『霊界物語』とちがって、きわめて庶民的であり、かつ軍国主義的であった王仁三郎の真の姿を出している。

Bombo 爆弾 上海戦に支那の暴兵ボムボ（ぼんぼ）んと我陣営に爆弾投げたり

Čano 「銃」撃鉄（うちがね） 村田銃撃鉄引けばチャーノ（支那）人助けて呉れと双手合しぬ

Heimano 大将（コサックの）、首領 ヘトマーノ（屁と魔の）如く隠れぬ支那軍の大将、首領は雲を霞と

霞と

Hierah(k)io 階級制度 階級制度撤廃のヒエラルキーオ（日選る既往）の、落魄道類に迷ひしン

ヒエート国（類）は「頓」の誤植であらうか

Heziti 躊躇する、迷う 支那のヘズィティ（兵実地）に向へば躊躇する銃声聞いて逃げ迷うなり

（この箇所すべて原文のまま）

これはほんの一部分である。大本教の研究者たちにすすめる。この本は最近増版されて容易に入手できるから、自分の目で読んでみて欲しい。人の本からの孫引きをしていては、ときには危険な結論にみちびかれる。

出口栄二を先頭とする大本教の平和運動への進出について幻惑され、戦前の弾圧が、あたかも平和運動や反戦思想のためと思ひこんでいる向きが、どうやら一部分に根をおろしているもようであるが、

これがとんでもない誤解であることは、『大本七十年史』そのものが何よりも雄弁に物語っている。北一輝や出口王仁三郎を「反体制的」というカテゴリーに入れることは、この意味ではまったくマトはずれである。かれらは、もともと体制的、いや、体制的でありすぎた。その「反体制」ぶりというのは、時の権力の外にあり、権力者の手によらずして自分たちの手による、より以上体制的なものを作りあげようとしたことであって、人民にとっては、権力者のそれよりも迷惑千万なことであった。「時の権力に反逆しようとしたもの」と第一章で規定しておいたのは、このためであり、筆者らは、「日本的土着社会主義者」として北をながめたり、王仁三郎を「民衆の味方」と考えているわけではない。「時の」というところに重点をおいてみて欲しい。

注

- 1 磯部浅一「二・二六事件獄中手記」『二・二六事件』一九六一年 日本週報社版所収。ただしここでは、橋川文三編『超国家主義』一九六四年 筑摩書房版からの引用。
- 2 北一輝「日本改造法案大綱」『北一輝著作集』第二巻 一九七〇年 みすず書房。橋川文三編 前掲書。
- 3 村中孝次「丹心録」橋川文三編 前掲書。
- 4 宮崎巖（伊東三郎の本名）『満鉄とエスベラント』『協和』一九三九年一〇月号 満鉄社員会。この本は La Revue Orientale 一九三九年十二月号より引用。
- 5 『直言』第二巻第六号（一九〇五年三月十二日）に「去年十二月十八日モンペリエに開会したる仏国社会革命党エロール州大会は……エスベラントを万国語と認め、その学習を奨励すべきことを決議したり」という記事がある。ここから堺利彦の黒板勝美インタビュが実現し、次の号に「エスベラント語の話」がのようになったのであろう。
- 6 長谷川義記『北一輝』一九六九年 紀伊国屋書店。
- 7 大本七十年史編集会『大本七十年史』上巻 一九六四年 宗教法人大本。なお、松島栄一・佐木秋夫・村上重良・上田

正昭らが、出口栄二を会長とするこの本の編集会に協力していること、とくに上田が全文のリライトにあたったことに注意しておきたい。出口の意図と、これら「進歩的学者」の業績が、この本の完成時点において、すでに教団内部に異端的存在になっていた、という意味においてである。

8 宮本正男「北一輝とエスベラント——大本エスベラント運動の源流——」La Torco 一九六五年七月 福井県エスベラント会。

9 『国領五一郎・山本懸蔵著作集』一九六三年 日本共産党中央委員会出版部。

10 橋川文三編 前掲書。

11 梅棹忠夫『日本探検』一九六〇年 中央公論社。

12 出口王仁三郎『記憶便法エスベラント作歌辞典』一九二四年 天声社。戦後版は一九七一年 同社。



水曜会のパンフレット『匈牙利の労働革命』（山口小静述）とあり、山川菊栄らの山口についての回想が付いている。

第四章 緑化か赤化か